《研究ノート》

not ... but 細見

田　中　　実　・　田　中　真　実

1．はじめに

英語の接続詞（conjunction）の１つである相関接続詞（correlative conjunction）には、both ... and、either ... or、not only ... but (also) などがあるが、not ... but はどうか。

Quirk *et al.*（1985：940-1）では、not (only) ... but も相関接続詞とみなされている。が、この not ... but だけについて詳しく取り上げて論じられるということは、従来、あまりなかったように思われる。

そこで、本稿では、相関接続詞 not ... but の変種とその実体について見てみたい。

2．not ... but の変種

まず、（１）のような例を見てみよう。

（１）He didn't smile much because smiling wasn't his way, but he was *in no way* morose, *rather* the opposite.［W. Trevor, 'Broken Homes'］

（１）は「彼は笑うということが自分の性（しょう）に合わないからあまり笑わなかっ

＊2009年９月14日受理。

たのであるが、だからといって、彼は決して気むずかしいというのではなく、むしろ、その反対であった」という意味である。つまり、（1）の〈in no way ... rather〉は、〈not ... but〉の変種にすぎない。

こうした変種の最も単純なものは、〈not ... but merely/ only/ rather/ ... 〉のように、but の部分に merely、only、rather などが付加された形式である。1例のみを挙げておこう。

（2）His indifference was the consequence *not* of lassitude or despair *but rather* of an excess of hope.［J. Cheever, 'Torch Song'］

（2）は「彼の無関心は無気力や絶望ではなく、過度の期待の結果であった」という意味である。

これとは逆に、複雑な形式をとることもある。例えば、八木（1967：65）には〈no ... ; on the contrary ... 〉の例が挙げられているが、これはやや古めかしいといった感じはまぬがれない。

（3）The consequences were uproarious beyond belief: but *no* one seemed to care; *on the contrary*, the mother and daughter laughed heartily.［C. Dickens, *A Christmas Carol*］

（3）は「結果は信じられないほどの騒々しさだったが、だれも気にする風もなく、それどころか母も娘も心から笑っていた」という意味である。

形式上の複雑さの度合いはそれほどではないが、〈not ... but〉における but を、and に置き換えた例も見られる。次例を参照。

（4）a．*Not* the method *but* the timing is questionable

b．*Not* the method *and* the timing is questionable.［以上、Gleitman, 1969：86］

Gleitman は、（４ａ，ｂ）を同義の例として挙げている。すなわち、両者とも「方法ではなくタイミングが疑わしい」という意味である。

同様の例は、かつてアメリカ大統領であったフォード（Ford）の次の就任演説（inaugural address）の一部にも見られる。

（５）I am indebted to *no* man, *and only* to one woman － my dear wife － as I begin this very difficult job.

（５）は「私がこの大変困難な仕事を始めるにあたっての恩義はだれにでもなく、ただ１人の女性である愛しい私の妻にあるのです」という意味である。

ちなみに、大統領の演説英語には、この〈not ... but〉のみならず、〈not only ... but also〉もよく用いられる。そのわけは、これらの形式は情報構造の観点から言えば、旧情報の not (only) ... の部分で否定しておいて、新情報の but (also) ... の部分で断言するという、演説においてなにかを主張する場合に効果的な方法であるからである。（2009年にアメリカ大統領に就任したオバマ（Obama）大統領の就任演説には、〈not only ... but also〉と〈not ... but〉とがうまく併用されており、前者は５個所、後者は変種を含めて４個所にそれぞれ用いられている。）

さて、言うまでもなく、〈not ... but〉の not は否定辞なので、当然、否定の文脈でもっぱら用いられる否定対極表現（neg-plolarity expression）との共起が予測されるが、この予測は、例えば、at all との共起によって実現される。

（６）The house when she got there was*n't* in Hampstead *at all*, *but* in Kilbum.［A. Wilson, *The Wrong Set*］

（6）は「彼女がそこに着いたときの家はハンプステッドなどではなくキルバムであった」という意味である。

3．注意すべき特徴

3．1．〈not … but〉が文の主語の部分に置かれているのが（7）である。

（7）*Not* (*only*) one, *but* all, of us are hoping to be there. ［Quirk *et al.*,1972 : 364］

この場合、〈not … but〉は通例の「…ではなく…」という意味ではなく、むしろ、Quirk *et al.* も言うように、「われわれのうちの1人（だけ）、さもなくば全員」という意味で、not (only) one, but all, of us は‘(only) one or all of us’にパラフレーズされる。

3．2．〈not … but〉が理由節を接続する場合、その理由節は、通例、because 節に限られる。次例を参照。

（8）He's not coming to class *not* $\left\{\begin{array}{l}\text{because}\\ \text{?since}\\ \text{*as}\end{array}\right\}$ he is sick *but* $\left\{\begin{array}{l}\text{because}\\ \text{?since}\\ \text{*as}\end{array}\right\}$ he doesn't like school.

［安井（編）、1987：307-8］

（8）は「彼は病気が理由ではなく、学校嫌いが理由で授業に出ていない」という意味である。この例のように、〈not … but〉に導かれる理由節は確かに、because 節である。しかしながら、理由節ではなく、理由を表す句の場合、because of NP、for NP、(so as) to VP と多様である。次に1例だけを挙げておこう。

（9）They did*n't* fight for a principle *but* to avoid a trouble.［Invented Example Checked by a Native Speaker］

（9）は「彼らは信念からではなく、トラブル回避のためにたたかったのだ」という意味である。

３．３．〈not ... but〉は分裂文（cleft sentence）の焦点（focus）の位置に生じる。例えば、Quirk *et al.*（1985：941）は、次のような例を挙げている。

(10) It is*n't* the players, *but* the supporters, that are responsible for football hooliganism.

(10)は「サッカーでのフーリガンの無法行為に責任があるのはプレイヤーではなくサポーターたちだ」という意味であるが、いま、(10)における〈not ... but〉を〈not X but Y〉で表すと、このXとYの順序を逆にした〈Y and not X〉の形（３．10.を参照）も、同様に分裂文の焦点の位置に生じる。(11)がそれである。

(11) She left her voice trail off, but it was Miss Roscommon *and not* the niece Angela who took her up on it.［S. Hill, 'How Soon Can I Leave'］

(11)は「彼女は声を引きずらせたままだったが、その彼女に応じたのはロスコモン嬢であって姪のアンジェラではなかった」という意味である。つまり、(10)(11)のような形を含め、〈not X but Y〉は分裂文では、実は、(12 a ～ f)のような形式をとりうるのである。

(12) a．It be *not* X *but* Y that ...

b . It be Y *and not* X that ...

c . It be *not* X that ..., *but* Y

d . It be Y that ..., *not* X

e . It be *not* X that ..., it be Y

f . It be Y that ..., and *not* X

次に、(12 c ～ f)の実例(13 a ～ d)を挙げておこう。

(13) a . It was *not* the words in themselves that made Tony rise to his feet and stride to the door, *but* the way in which they were spoken. [D. Lessing, *The Grass Is Singing*]

b . It was the money he cared about, *not* the social aspect of it. [D. Lessing, *The Other Woman*]

c . 'It is *not* me you are hurting, it is yourself,' he said. [D. Lessing, *The Grass Is Singing*]

d . I have no doubt that it was a principle they fought for, as much as our ancestors, *and not* to avoid a three-penny tax on their tea; ... [H. D. Thoreau, *Walden*]

(13 a ～ d)はそれぞれ、「トニーを立ち上がらせ、ドアのところまで大股で歩かせたのは、その言葉自体ではなく、その言葉の発せられ方だった」、「彼が気にしていたのはお金であって、お金がもつ社会的側面ではなかった」、「「君が傷つけているのは私ではなく、それは君自身なんだよ」と彼は言った」、「彼らが自分たちの祖先と同様、たたかったのは信念からであり、茶税３ペニーを避けるためでなかったことは私には明らかだ」という意味である。

なお、上の(12 c)のような形式に関して、Swan (1995 : 353) は、(14 a)のよ

うな構文は、純然たる統語上の観点から、(14 b)のような構文が容認不可能であることから生じたものであるとしている。

(14) a . It was*n't* George that came, *but* his brother.

b . **Not* George came, *but* his brother.

(14 a)は「やって来たのはジョージではなく、彼の弟であった」という意味である。

さらに、(12 f)のような形式はやや古めかしい、と言えよう。

３．４．〈not X but Y〉において、X と Y に文が出現することも可能であると、太田（1980：581-2）は具体的な例を挙げずに、その可能性を示唆している。他方、Namiki（1977：note ５）は、〈not X but Y〉は文の接続はできなとして、この点こそが〈not only X but also Y〉との唯一の違いであると言っている。ところが、実際は、〈not X but Y〉は文を接続することができるのである。それは、通例、〈It be *not* that ... *but* that ...〉のような、いわゆる It ... that ... 構文の形式においてである。

次に１例を挙げておこう。

(15) It was *not* that he had lost his sense of reality *but* that the reality he observed had lost its fitness and symmetry. ［J. Cheever, 'The Geometry of Love'］

(15)は「彼が現実感覚を失ったのではなく、彼の観察した現実がその適合性と対称性を失ったのであった」という意味である。

３．５．疑似分裂文（pseudo-cleft sentence）の焦点の位置にも〈not ... but〉は生じる。(16 a ～ d)を見てみよう。

(16) a . What he is is important to himself.
b . What he is is important to him.
c . *What he is isn't important to himself.
d . What he is isn't important to him.［以上、Pinkham & Hankamer, 1975:435-6］

(16 a , b)のように、What S be F.（S は文、F は焦点）において、be が肯定形の場合、F には代名詞の単純形も再帰形も出現可能であるが、(16 c , d)のように、be が否定形の場合、F の代名詞としては単純形のみ可能で、再帰形は許されない。ところが、(16 c)も(17)のように〈not ... but〉の形式になれば、それは許される。

(17) What he is is*n't* important to himself, *but* proud of himself.

(17)は「いまの彼は自らが大切であるというのではなく、自らを誇りと思っているのである」という意味である。

３．６．〈not ... but〉が関係節を接続する形式では、通例、not は関係詞の直前ではなく、関係節内に置かれる。次例を参照。

(18) We conclude this chapter with a problem for which I can*not* find a satisfying solution *but* which is of sufficient interest to warrant inclusion here.［Jackendoff, 1972 : 364］

(18)は「満足のいく解決策を見つけられるというより、ここに含めてもよい十分興味ある問題点を提起することでこの章を終える」という意味である。

３．７．〈not ... but〉は通例、２つの要素を接続するが、ときには３つ（以上）の要素の接続も可能である。１例を見ておこう。

(19) The kind of having is *neither* physical possession of any sort *nor* belonging, *but* possession which is perceptual, and again, inalienable. ［Green, 1974:99］

(19)は「持つということの本質は、なんらかの種類のものを物理的に占有することでも所持することでもなく、知覚的に、かつ、また、譲渡できない形で占有することである」という意味であるが、〈not ... but〉と相関接続詞の〈neither ... nor〉が混合して３つの要素の接続が可能となっている。

３．８．〈not ... but〉において、not はしばしば、補文から主文に繰り上げ（raising）される。(20)を参照。

(20) Often negation does *not* seem to apply an entire sentence, *but only* to part of it. ［Jackendoff, 1972:254］

(20)は「しばしば否定は文全体ではなく、文の一部のみに適用されるように思われる」という意味で、not は本来、to an entire sentence の直前に置かれていたものであるが、主文に繰り上げされた結果、このような構文になっている。

こうした〈not ... but〉における not が文中で比較的自由に移動しうることと関連して、太田（1980：581-2）は、not は Aux（iliary）の位置でも、not が直

接修飾すべき要素（焦点の要素）の前に置かれても知的意味（cognitive meaning）は同じであるとして、次のような例を挙げている。

(21) a. I did*n't* see John *but* I saw Bill.
b. I did*n't* see John *but* Bill.
c. I saw *not* John *but* Bill.［以上、太田、1980：581-2］

(21 b)は(21 a)のI sawが削除されたものであり、(21 c)では［$_{NP}$[*not* John] *but* [Bill]］が1つの構成素を成している。したがって、(21 a, b)は「ジョンには会わなかったが、ビルには会った」、(21 c)は「ジョンではなくビルに会ったのだ」という意味になり、知的意味は同じでも、そのニュアンスは異なる。

3．9．〈not … but〉がLeech *et al.*（1982）の言う非連結等位（unlinked coordination）を形成する場合がある。次例を参照。

(22) *You're not a man, you're a mouse.*［*Leech et al., 1982 : 109*］

(22)は「君は男じゃない、君は意気地なしだ」という意味である。(22)は本来、You're *not* a man *but* a mouse. としてもよいが、but を省略して、you're を反復する形になっている。これは文体的に見ると、送り手（addresser）の苛立ちとか怒り、戸惑いといった、なんらかの感情を表現する手段になりうるものと考えられる。次に、いくつかの実例を観察しておこう。

(23) She did*n't* look around, *not* this queen, she *just* walked straight on slowly, on these long white prima donna legs.［J. Updike, 'A & P'］
(24) Suddenly she realized they were exchanging a smile: there was *nothing*

friendly about this smile, it was *merely* two cold flickers of recognition. ［T. Capote, 'Miriam'］

(25) The boy did*n't* have his hand raised to thumb the ride, he was *only* standing there.［F. O'Corner, 'The Life You Save May Be Your Own'］

それぞれ、(23)は「彼女はあたりを見渡さなかった、この女王然とした子は、ただ、この長くて白いプリマドンナのような脚でゆっくり、まっすぐに歩き続けたのである」、(24)は「突然、彼女は自分たちが笑みを交わしていることに気づいた。この笑みには親しげなものはなにもなく、それはただ、一瞬のあいさつの冷たい表情にすぎなかった」、(25)は「その男の子はヒッチハイクをするために手をあげるでもなく、彼は、ただ、そこに立っているだけだった」という意味である。いずれにおいても、〈not ... but〉における but を省略して、コンマで代用し（これを連辞省略（asyndeton）と言う）、次になんらかの主語と動詞を必ず続けるという、非連結的等位を形成しているわけである。

３．10. 〈not X but Y〉では通例、X と Y にそれぞれ、強調強勢が置かれる。次例を参照。

(26) Terry must have been being *not* FOLLOWED, *but merely* AUDITED. ［Ross, undated: 1］

(26)は「テリーはずっと追跡されていたというよりは、単に検査されていただけにちがいない」という意味である。確かに通例は X と Y に強調強勢が置かれるが、対比が意図される文脈では、not に強勢が置かれることもある。その場合、次のように not の縮約は許されない。

(27) *Tom is always in the library, while John is*n't* always there *but* sometimes.

(27)は「トムはいつも図書館にいるが、ジョンはそこにはいつもではなくときたまいる」という意味で用いられているのであろうが容認されない。しかし、not に強勢が置かれる構文は有標（marked)、すなわち、特別な場合であり、無標（unmarked)、すなわち、普通の場合は、やはり、X と Y のそれぞれに強勢が置かれるものと考えてよい。その場合、X と Y の要素はいずれも強調されてはいるが、文末焦点（end-focus）の原理からは、Y のほうがより強調されている。なぜならば、〈not X but Y〉では、X を否定し、Y を断言しているからである。

これとは逆に、X のほうを Y よりさらに強調したい場合はどうすればいいか。Quirk *et al.*（1985：941）は、排除の等位接続詞（repudiatory coordination）の and を用いて、〈not X but Y〉の X と Y の順序を逆にした、〈Y (and) not X〉を用いればよいと言う。次例を参照。

(28) a . He came to help, *and not* to hinder us.
b . He came to help, *not* to hinder us.［以上、Quirk *et al.*, 1985：941］

(28 a , b)では、〈Y (and) not X〉において、文末焦点の原理によれば、Y よりは (and) X のほうがより強調されていると考えられる。それぞれ、「彼はわれわれを助けに来たのであって、妨害しに来たのではない」という意味である。

さらに、この〈Y (and) not X〉の and を but に置き換えた〈Y but not X〉の形式も可能であると太田（1980：581–2）は言う。例えば、

(29) a . The house is vacant now, *but not* empty.［田中、1987：74］

b．I mentioned the plot to John, $\left\{\begin{matrix} \textit{and not} \\ \textit{but not} \end{matrix}\right\}$ to Bill.

［Jackendoff, 1972: 343］

それぞれ、(29 a)は「その家はいまは空き家だが家具はある」、(29 b)は「私は話の筋をジョンに言ったのであってビルにではない」という意味である。

4．おわりに

以上、相関接続詞〈not ... but〉の変種とその統語的・意味的実体について見てきたが、なぜ、相関接続詞なのか。

それは、あの Halliday & Hasan（1976）が、cohesion（つながり、結束作用、首尾一貫性）といった概念をもちだしてきたのは、テキストにおける「文と文との間の関係」を問題にするためであったからである。しかし、テキストの単位を構造的な文（すなわち、主部と述部を備えた構造体）とするならば、当然、「短文と短文」、「語句と語句」との間の関係についても取り上げる必要がある。その際、関与するものの１つとして相関接続詞があり、その実体の解明は cohesion の研究に欠くことができないものであると思われる。

主な参考文献

Halliday, M. A. K. & R. Hasan (1976) *Cohesion in English* London: Longman

Leech, G. N. *et al.* (1982) *English Grammar for Today: A New Introduction* London: Macmillan

太田　朗（1980）『否定の意味』東京：大修館書店

Quirk, R. *et al.* (1972) *A Grammar of Contemporary English* London: Longman

..... (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language* London: Longman

安井　稔（編）（1987）『例解 現代英文法事典』東京：大修館書店